六月廿三日送秋右廿三日 天満宮卯
興之時供御厩所にて

六月
きの吟

午間の七夕つめ
白雨にうつや梅るの墓の草
多立の射剣て
六月廿三日 夜水をうち女て
あするや扇 秋
五月雨や俤に似て美まゝ十七 吉適

（陸々）

寒垢離の人に戻りて 祐北
吟行於の字句 活吟
男山のふもとの桜 に
集の一冊こゝろ 帳の即

夏
器用
衣服
人物
飲食
地理

春宮の年山
月の朝の吟
あり

中山の
項に
月と梅の
香まて
春智十支鉢
興次郎傳の
句ありし
五十三次
江戸より
京迄
寄甲
の家中
帳外
貴船の末
社に作り
魚竹にのりの
四條の橋
等を
杜をけし
陸々

宇多所在

六月七日苗木の城主遠山信安公初めて国に入り給ふその
引たてちからの物上下を美しいさましき風情なり

うつふいて　扨も初夏の光り哉

山鉾やぼるおろしの入郭公

涼しさの中西民部の本

夏鶴ト

天文地理

人相吉凶

初雪の

玉津嶋驕西

陸々

夏鶫

（除天文地理）

一夏を守りくらす四月のまゝ

病牀の吟　捨て去る人なき迄也

時鳥鳴や　子里たゝ着日淡路なる

伊吹迄よき人もなかりけり

宿の燕比上い車一輛　なる

病後　埋み火やたゝおこし淡路なる

ふりむくや富樫泣かくれてなる

おもかげや　危きを救ふ手なる

又初雪や　てる書附

（淡々）

松得ん　ふい生す春か　ふな（洛々）

雷の時に　此四月六十日を　ふな

李夫人を抱けい　陸の初雷

夏

（陸鵬）

（延）

（洛々）

掃き寄て　苔の花もち

題牧帳　蚊を雨や　庭つ

夏動物　蟻　家を　蝉　芝の

山神の小便　清　蝉の　辞

多の降る山　水の　事

山の多き春　飽の時あ　夜つ

江若に苔庭子移る　秋　水雑　たし

探題　岡南朝　奥田亭

此松撓しすれ　来人雷か　れ

啓の花に生　を帽のよとせ　小

野馬一正面　蝉を　よとせ　野

洛々

夏木竹

喜撰命宝の棟ら礼前ら礼 梅の花り礼
二三足新梅みたるを折ゆき

武陽にて 時しらぬのかさしを送る野梅ふ
梅ふ礼なれなに月にかてる柱あるじ
富天靈 あなあ木
おもに修 筍のきぬ 筍のぬすみ ふ

庭前異典 梅ふゆ きぬ
吳昌にあふ 洞みなる川る酔ゆ 山若葉
斜月楼山をふす

雑菌院 銀の河系あそ 暮紅葉
水流直下三千尺 美竹 筍のはやめに
伏陽小倅屋布にて 生え残りの青竹の水の花
洟々

洟々）

梅若に蜘底を作り宵世
後去時雨の日の後の

蓮 世をそれるまの庵も荷しまの（洗々）

寓居止窮

祖園秋興時候 梅もや障子の穴の朝の山
入るまいれた 梅もや 正哉 嵐の柱 まり

蕉翁芳名の短冊を得たり 世をこれり 心に牛筆の点滅し芭蕉の筆
同一句短冊を書るあり 新案に不及

雪をたもやおりのあ

正に此筆も重く芭蕉の筆

残暑 蕉散す飯にもなるぼ世郎花

秋時候

老をいとも 京の秋 年をたとへ八芒井の帆

七月千三日 天王寺廣田の祭の日 夜をこめて 雨の土産や粉の川
先と弁当後の

利の為の秋 雄の秋をくるや 朱林

八朔の今 梅うや今 朝吹かす秋二月

永陽後庵の秋 老をくやしく旅とをなす秋の宿
甚多おもちかれ

九月永仙を見たる 水仙や十八日のかしら 衣
天王寺廣田の祭の日 千個の木に情玲の逆さまにうたた
寺翻筆 ふるくまて

千すぢもそりなす節海乃秋

秋人素

高浜虚吟

淀川下り船　星逢ふ夜水を枕や船遊び

馬ならびたる向うの村

現の世空の生たる雁の棹

星二桶汽車内川風雨の上

移り香の情も流れ行く秋の人（刻）

浜と

かくら崎や松より青き星一つ

蓮（はす）の葉にうつる露さへ星一つ

仰ぐ人命もちぢめり天の川

竹田の七の井戸

淀川の河原石

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

ああ…と思ふ…

壬七月の冷 鶏小屋のうら柿落葉

悄然たる雛をつゝむ 魂迎

末の人を知れぬ世に魂祭

魂棚や秋は鴻の来る頃の

瓜をきて馬とも多へのちの

七月十六日鴨川の家に
遊びて也亭灯ともしころ

童陽

刺繍の塩干て木の初紅葉

ものゝ…まゝ…なの…

なでしこの後の袖

盆やすみ小翁梅乃屋月夜七

秋

天文

（月七）

庵の耳ちかめてむかふの松風寺か天の川

手摺のまゝ一首 天の川

稲妻や山風のあけの車 傍

稲妻やゆうきの風

笛もてる人も来りて秋の風

深閑を稲妻のみ松ふ

久世戸の玉垣を或ハ泣 或ハ笑ふ女の姿

みまもりて淡々 雲を射て一村もとあまの風

八月廿四日寺に記す大きお世屋を築く者八秀鎮な
墳前に向ひ此の外松籟のみ何となく物さび渡
ゆくものなきを

なつかしき名もや
ふるさと
秋風や盗人の宿なるもさびし

小庭五六株
植もの皆枯るあり

秋風やむく〳〵に枯の茎

移り日も暮るなを蜻蛉の柏

方寸余首相九辺吉来て新穴あるを此に
月を凡月を乗て九月廿六日に

夜あの秋の風
民ハ今を世に
をもめ野らあとなし

（金茸屋）

（洛々）

名月や
天文地理

或晴
或曇

名月や人も先
降るも晴るも月見かな

香水滝にて
四重清吉を

名月や水乃月
あるもなし月此相陰に神垂ハかりなを

一とせの山
深きの石に
名月や腰掛ながら
月見かな

名月や
名月や
名月や

（天満橋徐歩）七宵満ツ天のうみ

日に桂男よりそひ

味そ宵お山

名月や野に次人なし蝶の貝

（渓々）

和頭庵にて

良松清光ちる

小川芝ちる

三吉の松文たり阿の和尚

病夜あの川なの近江の景と月見ル

三吟一吟例好きこ春月宵

名月や信濃に残れ姨捨山

名月や関の仮寝を物むらん

（陸奥産物地理）名月や北松なし

おもふ松月やん

年を経とあるて月見ル

名月や花なき寺を行見せ

夢に惜ろ古里楼東南折

山更山り百八ツをきき云

ふるさとて宵のく表あ

渓々

秋月ト

天文生物

（陸名月）

暗夜那中吟

一字題 雁

珊瑚冠南嶺雲着帯

月もる鶴の岡松

馬子が聲もみるく

一声の雁も

十三夜かもて清光

十五夜を十偉の名へ

布袋形の背に雅るを

望むおも

もせいを向うう

法々蝶の形に

み庫一月の雨のくもり

うるかいす月清すの

島の時白小

なをとこ山

らん月の華

水乃哀

蛙宮にもの

きうたて

雁もつ門

の眉

月なき夜光り小天の泪小

月到天心處地を乳にて生の花

七月四日未土用也三年木の露
よとぶ　探題　神楽岡月　初月や葭ふなれや　短山
探題山窓雨霽　月のまわ村つ　人塚の月
別荘す山ふ　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の

秋月

（陰名月　陰天之生物）

雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の
寓居清光西園橋上に独歩　月や　橋の月
してまちの方をふ　雨もれ小雨を　降月や野ら　晴て月　三ケ立の

三津新地望月を探対東山を
望む　五天宝を以て東探をかつ

九月十三夜
良夜皆な雲ハ情晴）ハバおもてる　永（いさら雪も月の
久世の隠亭にて　東晴ハこの月ハ　軒の月
十三夜　東月ハ日蓮菩薩多の月　東山

（洗々）

半夜半晴　名里ことし四つ月（陸々）

雲漠の摩文迫ふ
十三夜八ツ谷の庵面化あり　古人此もとめぬ一夜を社の月

寛保三年七月十三
上京都中ツ　六十九我名月の月

小督の通の流るるを
ひとを前うに　仲国か京へ上るあり

秋

動物

木

蜘　柳　おもい落る相の松あそび

あの七夕の
赤須をかへて　入ぬうち六たいつぐら糸

題心宿
一点打かけて
一点打掛ける　秋の隈　北斗かたなし　やみ

陸奥産
の正宿　曙や　灰の中より　きりぎりす

大雪かぬに
折れたる　忘れそ　忘れて折ん袖の梢

竹の筒の管を通る
妙工、武陽の権八　死んでもふ若もあり筒の中

寛文迄いきて　一日の老人をもとめ　凡の相

大伯雪江武陽に帰るを京より当なき送る
日乃やまに　衣の砂　木枯　雪江　禅機あり　江字か杜を経の心有

砂れたる　わすれ　海近い凡の相

陸々

偶成　待ち〳〵て淨めをこゝろあの初雪か（渓々）

病中傷夜　鐘鳴りて狐なきけり霜の夜

探題　寄菓恋　偽もなよ屋になるたる梅の花

万書会六日夜机辺の高集て秋月に見月を弄しむ九月廿日

み犯す　杜へ吹戻す風なり二十日月

暮秋　党て帰庵の上なり

寒き菜を作るあるもみぢかな

つゐもち雑煮よ宿かせ初紅葉

立秋　朝の雲に

六月の嵐に怒る木の葉かな

三夜の恵に芳酒て餐しぬ淨のあり紅葉

題葉椒　食なふ亜ぬ君が涙かな

朱のつきし芽ハ誰恵淨荻

山峰の寿ハいつれを蘭の花

秋草（芒菊なし）

野ふ雉ハ帽牛俳果をうたるあこれ

ねぢ冬を我門へとうてうなくをそうするを

蘭尼一句と作ありて

横下の市頼送書軒ある

紫雲を来禁にとゞめ

日新の新る静る遊ぶ

淨々

通懐　随風生雲を木賊水（渓々）

秋

薄菊

（芭蕉先生山吟に招ふ　京橋上房の素を急輔にかりて）

うき人の五十に足らぬ花薄

（武陽旅宿言水南山にうつす）

昨日買ふて今日引の玉の緒たゆたひもせず尾花かな

獅子舞のかしらかたぶく尾花かな

（連開の）

けふ許り神のものなる秋の風

菊朝日動くや墨の法隆鴻（落々）

閑古中の句　七十の老人ふるはる菊の花

探題　垣の秋　其石も似すや仏ある菊の風情

朝にそなへをなすまゝをそのゝくての月あかり

あしたゆふべ

芝隆の加中西氏跡の木を無言帖の後　右京亮と云ふ前に作俳優技術を写
髪蔵をつゝ手紙となして天四天神を詣め奉りし日の老を偲ぶ昼則無ふ
袖次のまゝ招し盛舗なりん也人を好むのうくんう

菊に賦、の後頭第一帳を画　山吹の夕住なりと云ふ跡耕亦已稚とくなる
夫天命を楽みみ

（菊を花と許り卿悟ハおり）

うき人住てあるを喜ぶ言寂をわく

冬の時雨（歳暮し）

病中順快全

冬を先つ動く十一月

親見せたり人に花知旦冬ふ

暑退善哉に十先なれ仏佛なり

歳先ン謝名仏先と言れハ

冬牡　月にそそんみまく

竜まつのひとりのかゝしおきかな

雪の芝の消しおきかな

犬にのり格ちる

法々

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

杉顔の一まを干す孫もゐき（淡々）

ともくらふ人ハゐなくて柊さす

端おて柊さきそめし塩船の汐を宮ふ海をかな

奈宮森やそれむ越ほに降る雪さ小七（古道）

冬

歳暮

天文生物

（陳師走）

淡々

卵於枕もたゞあり年の坂

初年中紙と馬なり梅の花

梅捨て来るく雇こゝろぶ人を嵐室

紙馬て越すわ三百五十川

走跳たる箱ハもゝすり年の郷

卯月ま九月あの産乳忘

越後茅柴る月走するの

津の国のうこゝろ岸の松

いなる夢ゝてゝ牛飼て嵐を退耳大晦日

銭湯の暮衣なき年も一枚小脇も梅もかりあり年の内

誓ふ月あや年の不動尊四季の尾や北の町北狐狗年の糸

年の尾や北の町北狐狗二年をなすうつゝ後の波

ありくと年を定すや薄氷

西東くと雨甘く年くれぬ

指つる庵を定すや大晦日

倶に佛く硯も年の冨士

冬暁

桂の雫ふる人訪んもの等 陸々

先ぶれはしれば里へも年一本

冬暁 明ぼの花弁あるるあの枯まき枝

かんてんのかくるゝまでの春の雨　正秀

そも〳〵春を初く事は中華日本ともに

冬之部

人事

器用

天文

地理（時候雪など）

霜の朝庵に名を得山賤と居ながら　駒ヶ嶺

寒山拾得李杜（李白杜甫）

徒歩　空高く富士を見うしなふ枯野かな　芭蕉

病後　芒の葉にそまる入日や　同

東福寺など見しまゝ　然和枕して画しき富士の山　同

嶺雲庵にて　嵐風四面日も青〳〵もみぢ哉の松の山　同

冬ごもり又冬ごもり春を待つ　同

鉦の音を雲に聞ゆる寒さ哉　同

江戸にて春暁を待つ　同

明ぼのゝ空を見ぬ日も冬の朝　同

降る雪を打ち払ふ松の音哉　同

八幡奉納　神の代も仏の世とや冬の籠　同

山上半那谷三つ巡りまたも　同

大きな足跡ありけり雪の朝　同

淡々

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちくさかみ雪の歩を（法々）

左先年歳旦に「世のかあまを静かなり」此句まの字を吐ほう
世の亀静にと結て、真十一静のなき春ありと陰の字大た月のて
て発句「冬独居の窮にあるふ」此句窮の字て発句「秋大会
弥生のかこう米市のおを鏡入の工まにて仕たるを弥生を
たわしころう」を望なり 依昔記ことよりくそれかとうり

挨題寄恋

周の昔も討るを松のまくれ外
廿戸こるき底にゆうむーくれ外
有り柚の枝るの秋るの風小くれ

嗅岡の茶屋
亭に遊ふ
梅存の賛を

降雪和富士

我ふるを雪て彩の時雨外
一ーくれ雪ふりかくる神の境外
高津茶屋にて嗅ふらハむかあに海の時雨を見

（日文字を都到する）一時雨の宿ハ春雨 五月雨
（るなし）

達磨忌

秋てる和尚に獅の和ーくる
ひそ春んーくる彼の手おとるまで

鳥林君帰
暫にて即興
江戸にて卯也

来て泊戻るたれ外
江戸にて卯也。雨に春ていかさまを更けて一ーくれ外

洩々

梅存を以て 法照和尚生前影像庵主二人（法々）

水野大尽
情日記にあり

さらりと元のあるじの栄世夢

病夜 車をとめて枕かな

紙空小相模国早雲寺宝祖の菩提所にて雑髪の事ありて祇空と改む
宝祖の句「世にふるもさらに宗祇のやどりかな」と申すにより
予もさらに宗祇のやどりせん と松をば雪の梢に見る竹

世にふるも更に宗祇のやどりかな

砂丘たのしみ
黄菖蒲と申札物をおさせられる画ゐる画ゐる

盗人を門口に見る寒の月

冬之雪

天文生物

偶成 蓮に羽の雪をこぼすや水の音

和尚事仙を秘佛乃山ろう

常悟き人を初空松柳

初雪や袁とな人の浅り

初雪の埋みたびよ義政公

雨雪を砂つて雪の別れ公

乞食のよそをしさまた竹の雪

魚洗ふ刺の宮貴竹の雪

大神宮奉納竹の雪に香有り向田園

寄芦祝 乃婦 ゆき

浜々 赤名芦鹿

冬雪

（除天之生物）

初雪はのぞく岩の上
ふなま寺のかぶさりてお寺の雪
石段や庭に訪ふ土産かな
探勝
他雪かまくらの明方の雪
去川を訪ふもつとさし
前くつを止梅探勝の雪
それ程ふ刻たる雪の庭

雪の徐歩
題扇頭
若宮之釜
石段や三大阪一重佳客
砂丸いとや人小野く雪嵐
独麟禅師の一詩の
二字を冒頭にて
隠れたるすき間かな
六の花
法々
題画鏡
親子連れそれ
六の花

薩刀加中西氏鉢の木を二幅三幅の絵に
胡蝶となり何て神翁の法氏を俊ふにしかり中文もつゝ企義とよるき（渓々）
長号と長

寸拂ふ扇を袖のまゝ富士

小春之淦木と苔る日の輝ふ緑

冬
生物

芙の花乃仏の世や西の中

冬独法乃宇宙の嵐ふ葉ふ

蟻

芭蕉を布ふ

二三蔸の装束ふ

言くと田園まさに荒州雲の隠

花となんかへ川て見にふ雲の隠

玉泉禅師隼拂之時

風かくほかもの遊ひか秋尾花

大阪紙山にて水仙の角玉を枕ふ夜の外

渓々

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

大阪淀屋にて　感吟　　（漾々）

蘭冊更て鳥を扇　溝もものよ隆まみに月の川千鳥

（いとゞを云しいせの　　）　俳言の今こゝまたをこゝ牡丹

水仙や葉にそりくる懐手

題恵屋　一人行く主ある笠や雪の暮

志情　主ある笠の行ゆく雪の暮

至強　兄ありて宝を生む冬至哉

宝受をもて生れ　力雄のまに一

伽みる奥　　仙人を云屋を今日二人の元伯

宗旦像之賛　梨天元真を呼て元白と云

雪花を楚し骨格子月の

葛るを清　俤の葉沈

苔の葉に雪香もなし　懐の糸と（糸巻）

（漾々）

陸々

富士の山の
自画賛　月を待ち日を三度む山の富貴か

日々是好日

雑

ほゝまでも人の層の松の風

春雨や笠もの世の中の人にくまの松ふと

日々是好日年中の雑ゝ

活井舊室（明和二年冬歿）

日本紀や天地一枚明の春

梵鐘や日をひきのはす聲の中

春

梅木　伊波羅鬼が腕ついたか梅乃花

連摩賛　杉の目眼の塵かも知らす蝶一つ

目さすや活て見上る濱櫻

花あけさ礫から上乃心のな

裏庄や真晝中にて初日影

年の夜より留守ありて

礼者来て戸をうつ世や幸筆

蔵鍬雲を凝る迄高山の

舊室

幌一つ見えあり垣や桃花（舊室）
海棠よ眠りうすき馬の上

春

於井蒼室（明治二十年）

秋

夏

遊女賛　神かけて待つやうそなり　鵠
猫賛　牡丹にも眠れ女三の宮つかへ

笠着て悟られぬ錦　五月雨
達摩賛　此壁をにらむ紋もや梅雨の明け
木の白か曰く鰹なきそ恨なれ

大蒜喰七の嬉姫といひ鬼といふ百合の花
布袋賛　我膝にくらべて涼し満つる月
あついもの喰ふそつきと涼しかり
踏みわたる石の頭の暑さ哉（舊室）

舊室

柳さん自由になまめ暑さ
悼亀鹿　乞ハれても知らす手向の心太　（舊室）

夏

秋

孔子

猟圍繞
獅子と孔雀の
園と為して

貴賤の
人のたきゝそもよ
冬籠

負俵一個の化ける柳かな

貴賤の
代ゝから
名月を
寒の穴へ
寒の穴

旧室

冬

鐘九晴て
世の塵を鎮る
霜の劍

（芭蕉堂）

八樂菴米仲（明治三十年（六月十五日）
田

春
（生物之）

米仲

大つちまゐせ鉾おそん
ひん有よい

ねずん鮑うま雑あそ（米仲）
竜田や二家にあまる木の味
花影上樽子の気紙とい松たまにく務の気

寸馬豆人　まさまる人やさなる雑の豆
枕まる豆まる干ひ
乞姫の気ふそ足せまる干ひ

夏戸村　市探とい党来なあ　並大根
手立つやをあく形まるる源ら
さぐの口を守
まの和の大いあやなめふら
お午や雷いまる
手頭天王奉納

大津画替者之賛

春

生物

梅ちや多雨の気のくぐやう
書柳の雨まをなる
水魚の所小水晶な
横のうの一まる主の月へ
書陳のあ仏ちや一人、夕陸
まるのめてあるも
まの生ま
机まる編なの妻に編なの年
酒のめと人をあるよう
まる人のうの気仏
朋彩

米仲

夏

動物七

甘棠公ゑ
さやのひゑハ

山ちなつまる
穴ゑのゆ
淀舟のね
あゝゑ
夏ゑや
蓮の緑
ゑ舟の
ふとい

滝や五月雨
車や五月雨
屋の柱ハ
人道を
孤の
雷の音
田川
触ル五月の
茶汁

画賛

まへの中村伊兵衛を
句ゑに

柳ゑ鞠
山吹や馬に
梅がゝや八
駿か中の
茶舗当

山の端ゑ
初山の
東叡の
ゑ魚ハ
ゑ魚の
ゑ魚ハ
ゑ魚ハ
ゑ魚ハ

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

会衆人の云のうちにまぎれの
事を書ならべたるあとの次第

五月雨や涙もそうお更衣（米仲）

夏慶忌葉志

春来居老圃忌

あやめ草先陸奥殿へ一車
千氏の昔何者ぞ白うり

動物

米仲

糸あやつりの一寸やお軽
幕木やの客もおかしや尺そこお軽
あら浪にぬれて舟るや初鰹
あを蔵てのぼすや松魚の子赤はらや
子沢女帯の母親ぶりかなる月夜
子沢老男のたてゐの見さかし
な沢面ぶせあて行も秋
秋迷の帰つるかりやいきあいて線をすゝ人へ
な沢

角田川を過ぎて

角なる月のつやつや沈（米仲）

比枝やにごりの雲もつれなく解

そそぐ田水の音も月夜のまま

あさいの枕を敲く子規の使ひ

久米の一の小松

すぐるを水くるとお覚えず

飛ぶ雁に二月を成める光りかな（白鯨夏）

夏

秋

天文

動物

米仲

貞佐周忌

打くゝるのゝ夢の辛夷の垣ねかな

蝉のなきある夏ながら月の哀

夏ながら月見る時は秋の風

新月や雨もやゝ降る物ながら

初秋や露も砧うつなりそふの月

名月やうつくしき酒を掬すれど

名月や夢の酒をも掬すれど

我庵や生壁やゝも八月の哀を噛く

好て一夜まねてみる名の月見哉

曜南寺の日溜

みやいくかな

厂ゝ下三つあの四つあの水の音（向ヶ岡）

（米仲）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

（天文動物隊）

年ぎの傍水とゐふ馬正
俗一項あるいは生物学の

米仲

雨蛙

伊達深の四つ辻あたり踊か
色紙のやうな世界や景の変
女郎花こといふ花を見たりなどす
乙松を訪ふて
蕎麦うつ音かしかの世迷言
まゐまた踊るは秋の景
なりて先陣にあする花火
そうふる夜たかわく岩花火
灰そりや春あるの星のもと
らるるを忘るる浮世の秋
なるのつとめせよ菊の花

（秋の月　米仲）

雲の峰いくつくづれて月の山

たそがれの人もゆきそふ
老の夫婦つれ立つ角の小間物屋

三味線をうつくかすめの出稽古
於亀のすんもいそがん　蒼虎

初雁や其まゝ水の世界
水晶て出ふ一月見船

御かるの宮のあるそうそうの
のおゐのいろと鶏をこいまりくで焼の女房そう十三夜
えいまて

米仲

餓鬼の詞あり

みそ萩や便の後の

送別

旅の宿猶寒き夢をさそふよ

うら枯の芝生の庭や行秋

萍(メカキ)すき物と共に鬼灯(ホヽヅキ)なども捨にくる烟(ケブリ)

角力取(スマヒ)の箱たゝまるゝ

もみやまつするめ

秋茄子(ナスビ)の漬(ツケ)にほどあれや

萍(ウキクサ)も拾ふ

(米仲)

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

何虫の風情ぞ踏まん松茸哉　（来仲）

年ふるまゝ（すゝまゝ）修羅に残るとも残る

すゝまれぬ古仏

牛のるに野辺のなまこ踏るゝ

初雪や我耻——き傘の下

小風の富士やさなから雪の裾

冬

（変生物陣）

芭蕉

世の中の不絶羽織や東海

（雑巾着）

霜月の十五の法の酒の事

来つきの師走やそこら見えぬ雪

雪まやてまをつゝ梅

ちるもあるよ物のこゝろ

笠文の文字の吹ひおもてかれ

帰花ひ学の教の妻

ゆくゝもゆくゝも師走

鮒ぬて雑煮の肱

来仲

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

所思

比叡の花い山桜の色ごとに

[illegible]
[illegible]
[illegible]

烏にも袖の羽ふり夕霞
不二朗霞定まる夕けしき
淡雪や春のものとて濡れそふる

春
晴天や野を引きたつる雲雀かな
鶯の声や急がず油断せず
鶯よ竹を雀はのそらはのそら
奈良南大門のあたりにて
鶯の庵の前や梅の雪

春
地理
植物

波風や松を乾かぬ汐干かな

誹人の梅咲きそめぬ樹屋が棚
人魂になり〳〵と野中の梅の花
藪もれて一枝咲きぬ梅の花

狼の住むまことか山櫻
寝るもこと下戸ばかり花の夕嵐
春〳〵や見よとの花の夕嵐

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

降りそそぐ虹のそなたや翌櫻
くらけ入りて
うぐひすはかねてそ駄や花の雪

春

枝ぶりも見せず桃の花
海棠 盗むとも許せ眠る花乃主
雨持つてこちらえず落つる椿哉

藤さくやつゞまる春を引き伸し

夏
（生物なし）

息次に柳の見ゆる夏野哉
鶏巣しされバ鶏飼か閙の程
蚊帳釣て片付けらるゝ旅寐哉
機嫌よし天下の父母の田植連
あな暑〳〵障子をつゝまバ傳あり
日盛や蜘の囲光る 小松原
なまなかに雨雲見ゆる暑さ哉
五月雨のつもれる色や檜の草
五月雨や一日増に低く降る
五月雨や夜力のおさる音

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

白魯ハ禁レ呼
海端ヲ過ぎらず涼シ
虫干や女こころに
書外新宅 宿札も水際さち
（里芋ト）

夏

生物

口たくるもの淋しき水雞ヲ
ルろこの雲を掬む戸白牡丹
白芥子やあら力なの花盛
寐ニゐ千尋の底や時鳥
一村に一つのも乃か雨ヲ鳥
此魚に寐姿一つ初松魚
瀧見せバのぼりかねまし初松魚
梦に似て戦ふ宇治の螢ヲ
赤鬼馬も躍らす蝿の力ヲ
盛りあげて一たる椎の葉ヲ

蝙幅もかけろふもく類いふ
葉隠れに嵐帰くく　仏畠
仏畑や此世踊いは誰が魔忽
妻亦の示す詞書ありて
をしろいは低きが故を■仏の曼

秋

又招く陰の内侍や枯尾花（古今勢粋）
初秋や筏み寐たる人の顔
夢をかり夜もゆるまりて天の川
果羞こに押し合いたま〻昇祭
とし〻人の律義に見ゆる花火哉
蕨の瑠理冷かに咲きにけり
いかなれば白きを男女郎花
嵐聞けあのおとゝしの蜻蛉
白露や思ふて淋し見て薬
雞帰て里を告ぐるや霧の海
述懐と帰くおの籠の午鶏

ありくと夜のしみちや鹿の聲

画賛 秋の野や小町が柳笠取おとし

こよくとうるみて白し蕎麦花

名月や夜半に水うつ魚の店

見つめても鴨さへ目の先を蚊一つ通る月見哉

露の虫や月に世上寝て真中になる月夜哉

花野の名残ハ強からず神祠のぐく砧哉

辻堂のもし火は誰秋のそら

菊ハ黄にさのみ飾らぬ白い哉

七日雨ふれバ八重菊やふの九日と雨きめる

一つづゝ盃着ちらふの菊

稲妻の夢ハさめあらし初紅葉

冬（天文、動物ナシ）

一夜つゝ十夜はさゆる月夜哉

いける迄水仙寒し盃の上

遠山を舶の詰たり大根ひき

大根引うしろへあまる力哉

山川に風のかけ込落葉哉

落葉焚家やうしろに浅黄の夕烟

林しまや枯野を馬の親子連

髪置や僧のする迄見えず

煤ぬりて夕昏のとつ静也

餅搗やら揚屋も来べき宵

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

田室悼

水涕や机の上のみかん

行年を師走に成て愕かり

年の暮氷を見れば静なり

雁帰るや古き月夜の大三十日

冬
天文
動物

白井烏酔（明和五年四月四日没）

片時雨小春の色を染分ぬ

眺望

しぐるゝや筑地の御堂海少し

見る事よ千尋の上も鴨の足

水鳥や入乱れてし夫婦つ

ゆく四五羽鴨と見えたり星明り

千からびて千鳥啼心大井川

賑やかなものと見てねけふくと汁

師翁舊室五十日の法莚に
人と円居し侍りて

小川くいつとていや霜のある硯

初雪や稲の古株一つづつ
初雪や臨月近て十二月
積る外日本橋にも夜の雪
あら雪や眼にねんごろな川向ひ
富士近く見するは雪の力哉
雪こかし一人童子か音と成りけり
人なちの門竹の雪

春（生物なし）

白井鳥酔（明和五年四月四日没）

海を見て鈴なりの春ぶねかな　亜堂
初空や我先均す江戸の春
初東風や我先均す江戸の春
但船人や西へ東へ
面白き夢見る白昼や俱梨伽
雨乞をやめて神楽や神の秋
初午や市にうごめく人や何千
天の原ちりぢりに人や何千
ちりぢりに人や何千卸し
傷寒画の中ゆらり出るやうに

雛加予が有あり多き女の名

春

生物

鳥酔

あるが根笹にあけて物の表

大旅な遊びなや氣を准

学予四あの多飯の種へはふるし鳥北

飛魚にかぶえあ蛙ル

予の雛予が祝ひの雛を越て

青柳や祝ひする人の多

一鳥酔

張笠の蓋ふる宮や梅の花　（馬酔）
紅梅や雲のあるじ味なもの
梅が香に春宮通りあふ侍也
面かげのかりそめならぬ梅ぞ
酔ひ伏せば天下晴れなる春の山
芥菜の花や井手の古道咲つづけ
むさし野に生さへ一銭の若菜かな
苗代や夫婦のかたへ水加減

我慢を叩いて見たる松かな
楼のすゐ鍵さしこむ清水かな
客僧を上座に泊す蚊遣かな
薄暑や二本の杖もそんじもの
灌仏や三百年の花市也
居が代や四百八十年の数
短夜や月も骨折る山の端
小夏也待ち兼て土用雨
松ちかき湯殿のもや　雲の峰
宵闇のあをうしなふ雲さかな
久々に思ひきつたる蚊帳かな　（馬酔）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

芦に乗る工夫して見る湊かな　（鳥酔）

夏

生物

鳥酔

琵琶湖

雨雲にもまれ雪あり時鳥
葦刈やなを休めんでいかの雪
四阿の雪をめぐるや鳴水雞
草にあふまでは流るる雪汁
蝙蝠や雲たなびく羽の色
法そるものよ上なき初松魚
南子鳥舟は命の苧にあり
風の雲幡に吸れて一木かな
鶏の巣の数宝めむやいろは時
雞の若宮めぐる美濃かな

大空のところ〳〵　芙蓉の花　（鳥酔）

芙蓉や眼鏡をそゞす雨の色

悼亀慶

引きわけて傘も開いて見せよ蓮入花

蓮咲いて水ふるかくる

夕顔や夫婦して舸の宵涼

夕顔や裸でもどる人の軒

鳥酔

秋

（里物十七）

稲妻や野中の杉にかゞやきあたる

名月やみあかす顔もよしの人

神の代に残せし月の雨やさらし布

夕虹を見のたゞ花野かな

立ち寄りて花野かたるたゞ尼か腰

門くの闇からふるる海水

迎火や上総へ向ふ船が出る

迎火も打たで老いく雲ふかし

魂棚や多賀ひらよ膳の上

橋の雨鳥も　　砂の丸

生物

鳥酔

鹿の声ある小川を越えて来る

沖魚釣舟あちこちに世渡る石乃上

鶺鴒や二見の石を二ばしら

虫狩や武蔵野に多の墓あれ

晴ながら雨も集まず時雨哉

初雁や芦をもらず垂の雨

野となりて亀となりて鶴の声

朝顔や惜れくと咲きかハり

上風ハ酔ぬの事なり 萩の風

（鳥酔）

刈干の向ふそこも都菊かな（鳥酔）

雛ひな市錦木の中に立給ひ

扇山の往来拾ひ木の宝かな

咲てから月も在し菊の花

正直に梢のすそも一ツ葉のわ

冬

油まで入るなまこ壁の宝

一つ家の火ともす事にて時雨かな

芭蕉葉も風の音ばかりの冬の雨

冬の雨ふるまゝ水かれ〳〵なるに

八重一つ二つに成ぬ仏の前

貧乏入院の薄板小

煙松や貝ふく音の聞えて

日当りて和らぐ雪の軒端かな

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

そて侍つ月のよ鳥孔（鳥酔）
焚ほど小佛もおよす冬籠
雉の傷よ居合法師ん冬籠
陰なるにあるものて等わん
編笠のもし男やもの季候
実年のものを記てたる雨蛍

不夜庵太祇（明和二年八月九日没　六十三歳　右祇号並ニ月居（俳諧儀））
春
時候
目を明いて聞て居るなり四方の春
元日の居心や世に古畳
春寒く葱の折伏す畠かな
情なう蛤乾く餞哉
春の日や午時（昼歟）門はく人心
如月の頃雉因幡峨に家造りけるを訪て
のどかさに無沙汰の神社廻りけり
さて長き日の行方や老の坂

如月の比嵯峨の雉因幡が営める家見るまうでたをこふいまき半ばに木の工もきそひをけみぬる其傍らもろ大工先づ棟上んで見せつ春日影
没酒うち呑居たるたのもしさ（追）

太祇

永き日や　目のつかれたる（狂歌）　海の上

永き日や　泊らばや遅き日の照る　奥座敷

遅き日や　眼鏡を掛けながら

遅き日を　隣へ待とる　番所かな

漏る雨を　人と語るや　春の宵

春の夜や　女を怖す　作り事

行く春や　旅へ出て居る　友の数

女見る　春もしも名残や　渡し守

春の夜や　書筆難打　一氣の弱

元朝や　鼠も出すも　なき

長閑さや　月日を忘れたる

猪垣に　餘慶はけ　や　夜の空

春

正月人事内

年玉

七草

やぶ入

万歳

年玉や　杓子数そふ　草の庵

年玉や　隠れ家知るも　此夕

年玉や　利かぬ、藥の　醫三代

七草や　兄弟ともに　記揃ひ

七草も　書にたりけり　上手下手

七草や　餘所の聞えも　餘り下手

七草や　餘所の利たる　博奕打（独吟）

やぶ入の　顔けもくし　草の宿

やぶ入や　琴かきならす　親の前

やぶ入の寐るや一人の親の側
やぶ入の土産の菓子や持佛堂（独座）
万歳や舞ひをさめたり顔つき
万歳や飯のふきたつ竈の前

春深き

春

正月人事

（除笔玉笹 万歳やど又）

朱を研や蓬莱の黄精人間に落つ（鬢（白選））
饅食ひ一我にもあらぬ雑煮哉
投出すれ引得し胴ぶり
造羽子羽子つくや世心知らぬ大またけ（新五子 白選）
羽子つくや用意おかしき立ちはり
春駒や顔つなる（おなる白選）女の子
春駒や男持たる小屋の者（音しる白選）

餅焼くをたゞ瞬ぎもせず
節に成る古き訛や傀儡師
蟇つれ〳〵爺も来にけり二の替

初寅や窓づら赤き山おろし

一百歳賀
白馴〳〵一百や孫まの手毬歌
嫁入せ〳〵娘も多〳〵　御忌詣

丸盆に八幡みやけの弓矢引
子を抱て帰ぬ路を上る也　俊法外
ける春寐過〳〵めれど初日影

初午や借馬て走る人の中〳〵（麥人稿）
先代や厩の馬も暇乞
出代りや尻の太りも来の飯（猶賀）

春

二月人事

雑人事

出代や朝飯すゝる胸あれ
出代やきのふの問そむる一の牛
起〳〵に（蕪村）にんおや（蕪村）〳〵曜ふ彼岸
出代の膳へ〳〵法す　涙外
出代やきのふから言ふ暇乞
親に逢ひ行く出代の老の股（多少八）
凩見るや我も昔は男の子
からたちの首尾のわるさよ凩
落かゝる夕のかゝり凩
山路来て向ふ城下や凩の数
凩白〳〵長閑過ての夕暮

心ゆく極彩色や涅槃像
涅槃會に来てもめでた—嵯峨の釈迦
野を焼くや荒くれ武士のたたずまひ
穂ぬ枯れて接木の臺の芽立けり
家内て覗きから世—接木哉
人まねの覚束なくも接穂哉
つぎ侘びぬ世になき一穂得てより
炉塞や老のきげんの俄事
耕や昔—右京の土の艶
菩根に灸居てや彼岸引
畑うつやいつくはあれと京の土
つみ草や背を没すまで見わたす

春

三月人事

寒食
花喰や雛に對して醉狂ひ（猫）
桃ありてます〳〵白—雛の殿
紙雛や立そふへそはゝ袖の上
鯛買ふてみやけのそやそや汐干狩
二里程ゐて鳥も出て舞ふ汐干かな
御供してあるかせ申—汐干かな
ふらこの會釋ぼしやこぼしや（選）高みより
女子雛たゝのやうにならんけん（侍五子）
寒食に火もれぬ加茂を行や戒
鶴を画く雪井の雲や雛会
墨染のうしろ姿や壬生念佛

春三民人春

寒食

狂言は南無とも いたず 壬生念佛

御僧のその手 嗅 (たる医) や 御身拭

世を宇治の門にも 寐る や 茶摘歌 (歌(新五子))

屋根のくき 声のこもりや 茶摘歌

庇影 供やもの 問よる 守敦塚

鞦韆や 隣こらぬ 侍月体

春天文ノ内

風

雪

茶谷の白きけぶりや (秋元)

今はやる俗の木魚や 颱風 (秋元)

東風吹や道行人の面にも

川の香のほのかに東風のわたる

旅立の東風に吹かる火縄哉

東風吹くと語りもぞ行主と従者

駕に居て東風に向ふや懐手

糊おける鍋も東風行門辺哉 (秋元)

矢橋来る嬶よ娘よ春の風

春風や殿待らくる船かざり

春風や長刀持の日八分

春風ふらすや騎射の後苑笠

吹き晴れて又ふる空や春の雪 (秋元)

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

春天文

家遠き大竹原や残の雪（新五子 白選）

北山やしばらくして残る雪

日の光沖より来る雪解かな

白雲や雪解の沢へ入る空

踏みつけし雪解けよけり深山寺

色くろみのたつる雪解汁

地に消えて枝を折間や春の雪（猶）

春天文（陰風雪）

芥火の白きけぶりや（猶）つきわたる

夕かすみ（はる選）き霞汁

釣り向けば灯ともす関や夕霞

麥蒔いて通ふ嶋あり夕霞

廿四身を舟にまかせて霞汁

大船の岩にたそよる霞汁

川下に網打つ音や朧月

嶋原一愛宿戻りや朧月

欺いて行ぬけ寺や朧月

逢い見しは女の賊や朧月

月更けて朧の底の野風吹

海の鳴南やたぼ方〳〵月

陽炎や夜ヲの網干す川の岸
陽炎や筏木乾く岸の上
陽炎や景清入水一門の口
春雨や精舎すみて残る鳥
春雨や音こちらくに初夜の鐘
屋根に寐る主なき猫や春の雨
春雨のあるき涙や梓神子
春雨や芝居見る日も旅姿
春雨や書閒経よむ思ひ者
春雨やうち身拝からすまの服

春
地理

朽ゐせぬ落葉に塗や春の水
人音に逃込む亀や春の水
堀川や窗の下行く春の水
行舟に岸根をうつや春の水

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

春

鳥獣

鶯の目みハ竹藪なるき　高音外

鶯や賀にけるこの一間

鶯や庭樹のつゞく京の町

鶯や一たる古庫厩

鶯や葉のうこと水の笹隠れ

江戸へ遣ふ鶯帰くや海の上

鶯の声せて来くり岩の上

雉追ふて叱られて出る畠外（新選）（新五子）

ゆる〳〵と（夫と出てる秋庵）たゝ来る雉外

来た程に帰らぬ声や夜の雁

歸る雁聞かぬ夜がちにありにけり

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

春

神祇法楽

来るとはや往来数ある燕哉
燕来てなきくらす人間ん此彼の座
落ちて鳴く子に声かすむ雀哉
あなうのと鳥の巣見せぬ奄主哉

動物（陸鳥獣）

諫めつゝ繋ぎ居るや猫の恋
髭にて飯さぐり見えぬ猫の恋
草をはむ胸安からず猫の恋
猫の妻かの生ぶりを取挫ぐ
鳥や手つかぬ汲なき歌水（新五子）

蛙居て鳴くや浮藻の上と下
田螺見えて風腥し水の上
白魚や清きにつけてなおくさき
若鮎や水さゝあれハ岩の肩
香の逐ふて寝つかぬ蝶や花の上
見初ると日々に蝶見る旅路哉
蝶を見る身の傾きや酒の酔
よりそふて眠るでもなき胡蝶哉
堀川の畠かたらたつ胡蝶哉
人追ふて蜂戻りけり花の上

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

春

腹立てゝ水呑む蜂や手水鉢
葉隠れの機嫌伺ふ蚕哉
疑結ぶ花みふ行かず蚕時
蚕飼ふ女切に古き身たしなみ
高人や干鱈かさねてそゝくさく
声立て居代る蜂や花の蝶
いくばくの売碎きけん田螺賣

春木（櫻士）

梅活けて月とも佗んとも し影
手折りてそと折りてとし今園の梅
春もやゝ遠見に白し梅の花
紅梅の散るや童の紙つゝみ
紅梅や公家町二の日の枝山
工なき枝の左右や桃の花
地借衆一枝づゝや桃の花
照りかへす伏見のかたや桃の花
花まれに老いて木高きてふ落す
梢から折りて 柳外

木高くて霞つゝむる柳哉（猶）
棹留て飯くふ舟や柳陰（猶）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇

太宰府の神池を詠ず
北野にて（新古）

春木

引よせて手折をぬける柳哉（手折（句選））
虚無僧のあはれ〳〵く立る塀の梅
紅梅や大きな寝院を先さす
実のたゞある枝たのめ〳〵な梨の花
あなかちな木ふりを言す桃の花
飛こゝろもとゞめぬ蝶を弥生哉

物深き夜の櫻や（狩野）
寺の門

春

櫻花

ちる花の雪のあるじや二王門
散なく見えぬ若さや初櫻
中十日梅に別れて初櫻（新古）
見つれて花見にまかり帰るかな
出かけみん一樹にきそふ花見哉
京へ出て旅の休や花盛
行くとなき桃の運びや花の下
口たゝく夜の往来や花盛
朝風呂にけふの櫻のきれ哉（句選）
塵に皆櫻なりけり寺の暮
咲き出すと否や都は櫻哉

太祇

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

散り残る櫻八幾重雨の色
　　中凡めきて手癖ける春
不自由なる手でいよ花の下
嵐山の花見にかりて
筏士よ宮のとおらめ花盛
京へ来て息もつきあへず遅櫻
棒突に盃をさす花見哉
花寺のあつかり船や岸の月
付ませふ内義のけはや花盛
したゝかな櫻かりけて夜道哉
京中の未見ぬ寺や庭見る日や遅櫻

宋屋杖引事まあなき史
こちらへ西の海辺より立おさ
らなり夜深よ我もうし
灯ゐ蛇の夜まてもらさす也
春見まかりなを牡丹
有心地す

死ぬ〳〵と留むる男ふや
花盛

この比艶
春江華月夜
花の色や汐の雲も
（たとへもの）
関寺小町（新五子）

春
花草

小書院の此夕暮や稲寿仲
菜の花や吉野下り来る向ふ山（新選）（新五子）（一句選）
山吹や葉に花に葉に花に葉に
山吹を腕さし―こんで折よけり
連翹や黄母衣の衆の屋敷町
のびよかし―藤の茶の咲かで先
池の舟へ藤こぼるゝや　此夕
―なへよく畳へ置や藤の花
下手乗せて馬も遊ぶや藤の杜　人妻、藤社祭
崖路行寺の背や松の藤

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

春草
（陳花草）

芥の香や摘みあらしたる道の泥（路）
元舟の水汲むうらや蓉の蔓（妻）
花活に二寸短し——路の草
若草やかげ乙田になびかす畑
若草や背をする馬の真似尚
皮ひて——織多が入江や若の角
見えそめて乙多汐満ちぬ芽の角（の）
山獨活に木賃の飯を（の）ねぎ（の）
山葵ありて俗ならし——あず（妻）辛き物
蕨採て（折）筧に洗ふひとり（葉）

海棠や蝶い貝さめてどこへやら（狗飯）

春草

苗代や日あらそひて又小通る路
軸の好き天窓の好き土筆
茅も春の八百屋物なり菫草
里のあや髪み結なす春の草
江をわたる漁村の犬や芦の角
下萌や土の裂目の物の色
奉る茶(花)つもりてあるかなし
埜の塵やつもりて向ふもの
苣苔禁厨はからまき寺法(独喰)ず(麦人稿)
人を問ふ折根の水を春の猶(独喰)

夏時候

短夜や雲引きのこす不尽の山
短夜やけさ関守のふくれ面(顔)
短夜や無理に寐習ふ老心
あらすごや井戸も五月のまさ水
八重雲に朝日の匂ふ五月外
暑き日に水からくりの濁り外
氣のゆるむ日の影や暑の致仕の君
世の外に身をすてきる女髪の暑さ哉
めでたきも(ゆるめつる)居る暑さ外
朝寐してをのれとやしき暑外

炎天にてらさる蝶の（独嘯）
いかり哉

草の戸の草を住居や
有ときけ

名月や一夜も独り（麦林）涼まれん

涼しさの秋へ一重の（独嘯）
紙屋川

頬はれて上戸売い行く暑さ哉

酒好の頬猶無礼る暑さ哉

病で死ぬ人を感する暑さ哉

色濃くも蒼の干上る暑さ哉

松陰に旅人帯をくく暑さ哉

飛石にとかきの光る暑さ哉

酒蔵に幅の声聞く暑さ哉

木枕に耳のさはりて暑きく

？下手奈せて馬もあそぶや藤の森（白選夏）

涼しさや雨を露なる竹の月

釣瓶かり水呑人や道の端

夏

定期会事

新茶煮る暁起きや佛生會

灌佛や假に刻みし小刀月

蓼祭

追戻す坊主か手にも蓼かな

濡ともに（とも白選）幟立てけり朝のさま

古き世を紋に問ふる幟哉

幟立つ母なん遊女なりけらし

なごさめて粽となり母の前

妾か家は江の西にあり菰粽

くらべ馬顔見えぬ迄参にけり

江干行（ナし白選）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

二階から物の言いたや 鉾の児

祇園會(陰暑)

鉾屋々々に夕風そよぐ 雜水

清水地主祭(秀逸)

旦那清水地主祭にもセ兵衛

草の戸や思ひ置かへたる 青簾

月かけて竹植一日の端居かな

葵かけてわとらよそめや 賀の内

かようすの幕にかくる、祭かな

清水地主祭

景清や地主

下手のせて馬もあそふや 藤の森(裏葉)

藤の森祭

蚊屋そる人今更老か不調法

夏

人事 衣服 飲食

いとをしい痩るの裾や更衣

物がたき老の化粧や更衣

立向ふ廣間替りや更衣

羊よの丸い痩るをか一更衣

かこみに着て出て寒き袷かな

行く女袷着なすや憎き迄

綿脱てたます施主あり旅の宿

帷子のそこら編んで晝寝かな

帷子や蝿のつと入る袖の内

帷子や明の祈の裾軽き

帷子の癖ハつきよき腕かな

秀郷が東国より
もを送る

旅たちを人もろともや
早鮓の蓋取る迄の唱和哉
側に置いて着ぬ断や夏羽織
川風に水打なかす晒哉
水の中へ銭遣りけらし心太
かくる日や人今年度心太
飲みきりし旅のもとの水にあらぬ哉心太
お忘れも呑せて行や香需散
君めして突かせられそ心太

夏之事の内
蚊帳類
扇類

蚊帳くる人今更老が不調法
蚊屋に居て戸をさす腰を笑ふらん
蚊帳とる女に罪深し髪に（蚊ずの）
三布に寝て蚊帳こそ一の蚊に喰れけり（き白選）
蚊帳釣や夜半を好む真裸（白選 新五子）
寝た顔へ蚊帳吹あてる端居哉
いざ歌承らん（中白選）と（白選）
ことよせて蚊帳へさし出す腕哉（入白選）
帰り来る夫のむせぶ蚊遣哉
蚊遣火も見ゆや戸さゝぬ門並び
蚊遣火のうたて残るや夜のまゝ
蚊屋釣てこゝも方寸の庵

扇即位まふあるてふ住吉の
神契式の跡拝奉るとて皆つと
いまのみことを偲て

蚊屋釣て豊に安し住る民

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

貯ともなくて数ある扇哉

松陰に見るや扇の道中記

花鳥も裏絵は薄き扇哉

書弁一歌もうら打團扇哉

風呂敷の包むにあまる團扇哉

扇とる手へもてなしの團扇哉

週圍の笈にさし行く團扇哉

あふきする團を腕よ數珠外

蚊幮こゝの柄から參らすらん

もしたるあき團扇の音や夜の門

夏人事

田植

虫干

やさしやな田を植たも母の側

寺からも湊を出され田植哉

連にうしろ吹かす田植哉

下りたつと形定まる田植哉

早少女や先へ下り立つ年の程

早少女の下りたつあなたなる哉

虫干や片山里の杉魚ぶし

虫干の涼しさ語れ角櫓

虫干や拔身をさます松の風

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

夏人事
虫干

青簟や旅のはさみ箱
虫干や昔の誓詞ら札みな
虫干に雪皆かくす垣根哉

夏人事
（除定期人事
除衣服飲食
除蚊帳扇類
除田植虫干）

そこらより菖蒲上げり（麦の穂）大内裏
傾城の朝尾留匂ふ菖蒲哉

青簟や侍の後ろ向
能く答ふ若侍や青簟
ぬかりさよ夏書を去のふ後ろ向
月と日と男の手なる夏書哉
武士の子の眠さも堪る照射哉
蚊帳に細きぬし身やほら鶉とも
底見えて鶉川あさし夜の水
夕立の月になりぬる鶉川哉
鶉舟見る崖や闇路をたどるらん
関守の坪戸口閉れて立つ涼み哉
屋根ふきは屋根で涼の噂哉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

蜑多き市に隠るゝ（独吟）昼寝哉

真清水に足を涼みて橋を渡る

水練の師ハ鼓葉に（のつゝ画）涼みけり

空を見て涼みとる夜や宿直の間

手のやらぬ又の寐かたや蚤

水打て露こぼらへる門過ぬ

川狩や夜目にもそれと長刀

汗とりや弓に肩ぬく袖の内

夏入事の、碓の暮にかゝるなり

くゝらんや一本道の（麦畑）気仙針

列立て火影行鵜や夜の水

雷止んで太平嬉しく涼みけり

夏

五月雨
虎雨

五月雨の漏りて出て行　庵哉

五月雨や夜半に見吹くまさり水

五月雨や夜明見はつす旅の宿

五月雨や川うちわたす蓑袷

五月雨や類りに暮る水の上

ふる〳〵と水風呂（麦人稿）たくや五月雨

旅人や曽我の里問ふ五月雨

塩魚も庭の雫や五月雨（麦人稿）

物あふる深殿深し五月雨

傘焼（夫人稿）
川やあの伊吹藤ともの
宿とって五両月寒き夕べ（独吟）

其日も来けり（夜（夫人稿））虎が雨

夏

雨

雨の

くぐらんや木道の

夏天文

（陰九月雨虎雨）

橋落て人岸にあり夏の月
掃流す橋の埃や夏の月
片道は乾きて白し夏の月
あゝはなる鴈の寐さまも夏の月
夕立やことに鎮めたる使者の馬
白雨や膳最中の大書院
白雨や戸さゝに戻る草の庵
白雨や扇に受けし（下り蛟）
白雨はあなたの空や鷺の行
柳見ん餘所に夕立つ餘り風

夏天文

（新年に既出）

もゝいろの雲の立つ音よ木林の上

多武峯詣駕かきて行く旅の笠

嵯峨かけて三條通りて雲の峰

自雨の草の大書

自雨や蓑の中の大書

夏の雨ちまき屋ちまき屋

夏の月一日一夜の月

夏の月

夏

地理

（蝸牛に既出）

動物

獨り言ふて立ち去る清水哉

（偶成）

蝙蝠や傾城町の灯

蝙蝠や千木見えわかち闇の雲

知らで猶餘所に聞きなす杜鵑

子子和らかに照日に乾く水

子子和らかに照日に乾く水

子子和らかに照日に乾く水

夏

夏

動物（蝿、蛍、蝸牛之）

思いもの人にとゝれ夜時鳥
なぞ我ハ寐覚の老そ時鳥
時鳥駕から覗く行ゑ哉
蝙蝠や傾城出る傘の上
蝙蝠や千木見えわかる闇の空
知らで猶餘所に聞きなす水雞哉

偶成

ほとゝぎす鳥の鳴音のちらきやうくし

子子や照日に乳と根なし水
子子やなをおそろかに澄るとさゝ水
子子や蓮の浮葉の露の上

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

夏

蚊の声ハ打も消さぬよ雨の音
打し蚊のハーとこたへて掌
晝の蚊の顔に鳴り行く廣間哉
あまた蚊の血にふくれ居る座禅哉
立つ蟬の声引放すたつみ哉
一つまみ流る脚や水馬
蚊の有よ脛や稚うる
蒸のほす堤の鬼や蝿の声（麦人有）
猫の妻かの生垣に即を取畢（白逕夏部）

夏

蝿
螢
蝸牛

蝿を打つ音も厳しや閑の人
蝿を打つ音や隣もきのふから
出で来る硯の蝿の一つかみ
うつす手に光る螢や指のまた
手から手へうつろふ螢哉
螢火や岸にしつまる夜の水
取り逃す隣の声や行く螢
飛ぶ螢あれといはんも獨哉
火を奉げて関のゆるみや飛ぶ螢

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

かこつとある人の許へ

夜を寒ぬと見ゆる歩みや蝸牛
怠らぬ歩みおそらー　蝸牛
引入て夢見良からー　蝸牛
折あしと角をさめけり　蝸牛
影高き松にのそむや　蝸牛
角出して這はでやみそう　蝸牛
あり佗びて這ふて出でけん　蝸牛
来ー跡のつくか浅ー　蝸牛

春獅参宮を送る
餘花もあんるる教へ行　神路山

夏

木竹

野禾

高慮人の旅の一側や　夏木立
甘き香ハ何の花そも　夏木立
濃く薄く奥ある色や谷若葉
葉櫻の一木淋しや堂の前
夜わたる川の月あてや　夏木立
隣ハ木造のはし新樹かな
牛蒡のくらかり深よー　若楓（銀獅太祇）（新選）（題葉集）（新五子）
青梅の白い佗しくもなからけり
雨の岩葉をしはる（一本重友古）（飯重友古）（万選）
青梅や女かすなる（一本重友古）夜の茶

柚て高勝りなる寺叢　隠れ家や町から見えぬ夏木立
きつき咲庭や岩根の徹なから　宇都の山
筍や思ひかけず葉分に衝のはる

太祇

筍のすくすくあおより

筍を堺部猶吾剛の事の功

左君の軒やうき世のたのふ草（麦人稿）

深山路を出ぬけて明し夫の秋（あかし（ウ注））

百日紅寺中大かた見へにけり（麦紅）

麥秋や埃にかすむ書の鐘

雨重き葉の重りや（独座）若楓

麥打に三夫婦（世夫（ウ注））並ぶ栄哉

麥打や歌もつらなる姉妹

煙ゑの年一立ちん仏畠

人ごゑ縄もあらけり瓜作り

盗人に出あふ狐や瓜畠

物にあく心そつかし茄子汁

麥秋や馬に出て行馬鹿息子

夏草（陣竹、野菜）

岩角や火縄すり消す谷の花

低く居て富貴をたのつ牡丹哉

心程　牡丹の捲む日数哉

門へ来ー花屋に見せる牡丹哉

盗まれー牡丹に逢へり明る年

芍薬の蕾の湧立つ日南哉

前る人や受け取る人や　杜若

燕子花やの字田へ取る池の水

前る人の帯捕へけり燕子花

雨の日行かれぬ摘や燕子花

太祇

石圓より東寺の蓮贈られるに（送つ）

寄蓮恋

蓮の香の深くつゝみて　君が家

琴の泉と東寺（蓮見よりもどりて醉中の吟）

引寄て蓮の露吸ふ　汀女

夏の日

書疲や夜の水行く溝のへり

多顔のおとらぬ墓根哉

多顔やそこらの暮も白き花

白蜆売栗や片山里の勝の中

牡丹一輪筒に傾く日数かな

蓮の葉添けり瓶の蓮

あちら向く巻葉こちらも葉の茂り

沢瀉や花の数そふ魚の泡

沢瀉や藻の上越る水の影（石井）

蓴菜や老るよしなしけき水所

太祇

秋

時候

（秋夜暮秋土）

初秋や多立長じく夜の雨

涼しさのめでたかりけさの秋

初秋や障子さす夜とさゝぬ夜と

初秋や圍の風をいとふ人（新立ち）

朝寒を掾ゐ見居る泊り客

朝寒や起て居ながら古さゝち

旅人や夜寒問あふねふた声

舟曳の舟（来てとまる）夜寒哉

や、老て初子育つる夜寒哉

水瓶（鼠の落）夜寒哉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

泊舟や船の洗度や秋の暮
わたり人の減し芝居や秋の暮
ひとり居や昆布の湯湧す秋の暮
ありわびて酒の稽古や秋の暮

長月の末召波訪来りし時

身の秋やあつ燗好むむね赤し
何もなき夫婦訪来し句を皆申す
秋さびや覚えたらぬ句を皆申す
寺子屋の門うつくしや朝寒し（新五子）
朝寒く蝿のわるる竈の杉（新五子）
朝寒や旅の宿たつ人の声（新五子）

秋
秋夜
暮秋

長き夜や得手へもとどうし無別
長き夜を半分酒のつかひけり
長き夜や夢想さまざまとたのしむ（たのしむ新五子）
寝て起て長き夜なすむいきり引
永き夜や思ひ〳〵に行老の夢
長き夜や餞所に寝覚一酒の酔
秋の夜や自問自答の氣の弱

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

蓼虫――鳥の弱りも暮の秋
落る日や北みも南もつ暮の秋
壁つる傾城町や暮の秋
塵塚の蒼舞さきぬ暮の秋
行秋や抱けば身よ添ふ膝頭（暮の秋（新五）
寒きとて寐る人もあり暮の秋（新五）
氣のつうめ隣の貝や暮の秋（新五）

秋

定期人事

踊

七夕や家中大かた妹と居ず
七夕や對の娘に對の竹
里の灯をかにおもへば燈籠引（新五）
遺言の酒備へけり魂祭
掛乞の不機嫌見せそ魂祭
思へども一向宗や魂祭
魂祭る料理帳あり筆の跡
魂棚やはた餅さある秋の風
送火や顔魂きあよ川向ひ
線香に竹筒負せて生身魂

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

さ鯖や神とおぼき振舎
見かけ行麓の宿や高灯炉
夕立の晴行く方や揚灯炉
声聞けむ古き男や音頭取
彼後家のうらに踊る狐狩
思ふもも忘るもばかり踊狩
末摘のあちらむきても踊狩
初恋や燈籠みよすゝ貝と貝（新五子）
里の子し覚えて所まだら神
きりはふりてうさやよろさや呉服祭
木戸しめて明る夜惜む踊狩（新五子）
宵闇や門より銭の薄門（新五子）

秋人事
（陰宮期人事踊）

峰入

着もの失ひめくらや辻すもふ（新五子）
脱すてゝ角力なりけり草の上（新五子）
家つとの京知顔やすゞしさう
引組んで猶分別や角力取
裸身よ夜半の鐘や辻相撲
勝逃の旅人あやし辻角力
山霧や宮包守護なす法螺の音（新五子）
畠踏む仏せ侍や小鷹狩
採みよ採んで夜嵐わたる鳴子引（鷲尾）
出女の垣間見らるゝ砧引
泊居て砧打つ尼の友
剃て出る嵐のつゝや夜砧（新五子）
いく浦の砧や聞てかり寝一新五子）

太祇

半祭
橋わたす鉾さしもせず栗田口（妻入形）
婆利女祭
はたか身の夜寒わすれず祭かな（妻入形）

栗田口祭
古町の出るや頼母の顔合（妻入形）

田面祝
八朔や町人なから烏帽子
京留守居（新五子）
いく駒の足いやきらん鳴の海（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇

寐よといふ寐覚の夫や小夜砧
夜嵐や吹田うりたる案山子哉
（夜ぬすと）
筑を打つ漁翁が嘘や今年限（白選、新選秋）
ものゝ葉や魚のやどるふや下葉
新米のもたらす腹や穀潰し
とうあらと先新米ぞうすき国
薬堀頃も提てもどりけり
小山田の水落す日や去りかぬる
恋にせよ新酒呑ませつゝ結
よく飲めば価ハとらし今年酒
吹倒す起すふかまくら（新五子）

秋

月
露

明月の書きまぎらす大工
つゝじ（新五子）

名月や舟なき磯の岩つたひ（新五子）
名月や君かねてより寐ぬ病
雨に来てとまりぬ月見外
狂はやうに月見て又（こゝに夏の季）
名月や花屋寐て居る門の松
うの花来て蚊屋たつ夕月の夜
三日月やかたち作りてかつ寂し
三日月の船行かゝりや西の海
三日月や暮れぬる暮を波の上
三日月や暮れぬる暮を波の上
後の月庭の化物作り升り

太祇

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇　なたすも余所なるよ（新五子）

此後み更に雲なし十三夜

田舎から柿くるゝより　来ると石端居や月のわるき者

十三夜月いでそめて　隣から新五子

夕露に蜂這入たる垣根かな

小倉山の禁なる頃道ろの庵を仰ぎまいられハ扉あかいつく

露を見る我戸や草の中

いと若き大根に秋来て柳繁の木も一葉も散行蘭蔓の質も芳しき名のみ残り来ぬ道のくまく向よる中に交りて人の蘭帝よす

留守の戸の外や露打物だから

此夕ア　ぬなき櫛の露や照

眼さすに見る背戸なかけさの露（新五子）

夜の間の雲ゆりすふも庵葉かな（新五子）

秋天文

（陰月露）

月入て窗にもなさす　銀河

駕み居て挑灯もつや　初嵐（新五子）

つる草や蔓の先なる秋の風

風林織月落

あわに取る木の間の月や初嵐

渡し守舟流したる野分かな

野分して樹々の葉も戸之流れたり

浅川の水も吹散る野分かな

片店はさして倂賣る野分かな

君来ねハ油灯ともし　初嵐（新五子）

稲妻や舟幽昊の呼ふ声

枝裂そしろと明る野分かな（新五子）

太祇

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

川淀や霧の下這ふ水煙

行燈に都の塔や秋の空

身に冷えて早き浪りや秋の雨

椽端の濡てわしりや秋の雨

茄子賣揚屋が門や秋の雨

稲妻の二もりて見ゆれ草の原（新五子）

稲妻のなき月の空のなつかき（新五子）

稲妻やわりくて雲のそて（新五子）

稲妻や思へハ雲間より（新五子）

稲妻や雨雲わたる闇の空（新五子）

秋

地理

動物

闇なつかしあるよつくつや
庭のあつ（新五子）

笠ぬけた鹿の聞度夜となる

人住まぬ島山畑や落つる

端倉にて雨にあひ（金竜寺大徳の情）
一夜の合り免され嬉しと這上りて

ありし野の花や粧ふ鶉籠

椋鳥百羽命拾ひ（金一歩也）羽音哉（此ところ）

鮒口明せすと号（夏人）めへ

此鮒城内ゟ頂戴あり

あけ放し踊ぬ庭や蟋蟀

戸をあけて寐た夜積りぬ虫の声（白選）

ともし火のとゞかぬ庫裏やまくらす

太祇

ゆふやみのとくよりなき
暗一つ（新五子）

城内ゟ頂戴あり

蟋蟀

鶉鳴くこ蚊屋の外

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

雪ふれば鹿のよる戸やまりくす
空遠く声あはせ行小鳥 秋
静なる水や蜻蛉の尾を打ル
蜘の巣に棒しばりなる蜻蛉哉（句選）
沙魚釣や鼻たこめきて百とよむ
かた足にかゝとをやるやきりくす（新五子）
芋虫の芋のそよきを見えをり（新五子）
二里といふに一里ともいふ花野哉
（些少主なき櫛の露や照ツヾキ）花濁をくゞりて戻るおもしよさは
みそなをせ花野のうつる月の中

秋木菊

立よれば柱に降る雨合羽（新五子）
九年母や住持たばこて（麦人稿）
早乙女や平城のうしろたのめるきこく哉（麦人稿）

冊よせて見れば柳の散日哉（新五子）
散りそむる柳のふるき暑さ哉
名櫛くふ女かこゝろときめく
吟ずとも石榴無有形哉
残る葉と染めかはす柿や三つ三つ（新五子）
閑哉て又柿ふるゝ秋哉
柿賣の旅寐は寒し柿の側
かゝり欠く柿の渋さや十か十
石阪を菓飛ぶなり山風
町庭の心に足るや薄紅葉
鉄槌と女や野ら鶫るゝうちみち

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇

御持米の土産の味噌や
紅葉狩　（独笈）

草の戸の用意ありや
菊の風（新五よ）

迷ひ出る道の数根の照葉哉
一葉さへ重ちりやすき日数哉（新五よ）
旅人や菊の酒くむ晝休み
見通しに菊作りけり垣の顔（独笈）
渓水に添ふ菊白し見るもよし
菊の香や花屋が灯もせぶる程
菊の香や一つ葉をかくすまで
菊の香や山路の旅籠寄麁
残菊や昨日は他人酒の禮
朝露や菊の節句町中も
しつめたる菊の一即一句の句哉（新五よ）
朝市や通りかゝりてしめの菊（新五よ）

秋

蘭

一夜とめしけさや板間のこほれ萩
萩活て置ん人のさはる迄

草

其葉さへ細き心や女郎花
餓ゑてだに痩ん痩ん女郎花
手折てハ其色だに長し女郎花（新五よ）
朝顔や夜も寐ぬ嘘や番太郎
朝顔や小つめ役者のひろ起（新五よ）
朝顔に垣根さへなき住居哉

雨の野中人もすさめぬ女郎花
朝臥も実勝にもりぬ破小垣

京のほりし時

太祇

太祇

野の風や小松が上も尾花吹く

人の喪中を弔ふ

蘭の香や焼香清一夜もし

痩たるをかなしむ蘭の答ふ

ある方より蘭を贈らるに名立事あり乙

蘭の香や君かとあやき奇楠も若も又

もえ香や蘭も霞の紙一重（新年）

秋禾

太祇

大根も葱もそこらや蕎麦の花

蕃椒畳の上へはかりけり

鉢植も家も芒や唐辛子

酔顔や西瓜の雫もちながら

畠から西瓜ころがれたる庵

蛸追ふや艪も櫂も芋畠

芋茎さく門賑はしげく白ふ人の妻

（家十七句選）

一つ家も事あるさまや若烟草

夜の香や煙草寐せ置庭の隅

身一つをよせる竹離や種ふくへ
口をねる甑や禅のの(り)の(獦)
牛あるく岩もふくへ
青き葉の吹れ残るや綿畠
白き花のこぼれてあり唐かし(新五子)
刀豆のたくと下る花よもち(新五子)
めでたくも作りも出りも芋の丈(新五子)
芋の露野寺か鏡何やらん(新五子)
朝露や南蛮秀や打そよき(新五子)
かけ稲や大門深き置木杉(新五子)

秋草 (除菊、除禾、萱草、蘭)

(笠ぬけ森の開度夜とをなるノッヾき)
南谷山人の書の額あり薬師の宝あり
三行の草あり

南無薬師薬の事もきく桔梗
雞頭やすかなる秋と仏に奉る
雞頭や九かなき秋と天窓勝
浅水や浅黄の苣や剪々の花
乞れ刈てこ(一)(く)(二)早の花
芦の穂や沖の早風の餘ル
古畑の時あるながら野菊ル
萩(秋(新五子))萩原に辛こありく風の神
萩吹や燃る浅間の荒残り

(蕪村(新五子))

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇

経師何かし　芭蕉画る賛望まれて

裂やすき芭蕉に裏を打つ人か

引ケ寄蕎や柿のこるかこ

夜ル入ハ灯の漏る壁や蕎かつら

鬼灯や物うちかこつ口の内（新五子）

鬼灯や棚み出したる袖の土産（句選）

うら枯ていよ〳〵赤し烏瓜

掌ニ受て見する葡萄哉（新五子）

葉かくれなめす人猫や葡萄棚（新五子）

雞頭やのとつこまれ種（新五子）

中入ニ見舞ふ和尚や葬狩（新五子）

冬時候

大徳寺門前

これ〳〵の星あらはるる寒き日の風たのもしく行く童哉

床手洗ふ水も氷る嵐哉　後ニ再出

陰陽師歩くなるべし冬至哉

野ら中ニ土床門家や冬至の日

刺りこかす若衆のもあや年の暮

親の用に立つ子幾人年の暮

怖すなり年暮るるとこゝろかな

太祇　雅因を悼ム

唐へ行屏風も画や年の暮

年の暮嵯峨の近道習ひけり

年内立春　年内の春やさそふ月の前
十月の笹の葉青し　有籠（新五子）
人影も旅の晝間や　神無月（新五子）
神無月旅なつかしき日さし　（新五子）
水さしのうつむけてある　寒さ（新五子）
常なから狐火となる　寒さ（新五子）
餃ふて傳にて見る冬至さ（新五子）
起て見よ冬の旭の出る處（一枝追）
寒き日の往来小近し　朱陣村（物追）

冬
神佛事
冬籠

達磨忌や宗旨不信心
夜歩行の子に門て逢ふ十夜さ
おとらせぬ娘つれ行十夜さ
なまぬるや十夜の道のあふ人者
辻くに十夜籠りや遣手迄
あら笑止十夜に落る庵の根太
御影講の花のあるじや女形（命日）
人去て暁くらき十夜さ（新五子）
暁の　一文銭や　鉢叩

御佛事や尊く居る　（麦人追）
大徳寺開山忌　（落の前）
開山のこころかくてや寒の月（麦行）

太祇

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

京の水つかふて嬉し　冬籠
尻重き業の秤や　冬籠
来て泊守といたし　梁や冬籠
冬籠古き物語　新五子
身に添てさひしき行燈や　冬籠
なき妻の名もあふ下女や　冬籠
僧ありて女きらひそ　冬籠
いつまでも女きらひそ　冬籠
翁をまつりて冬ごもり　新五子
冬籠心の儘に何着ん

冬
衣服
飲食

紙衾　衣てるくと来たり寺林
紙衣着一音もせで暗き夜冊や綿帽子
新尼の頭巾わろし　家の内
頭巾をく法や老のしら髪
法体を見せて又着る頭巾かな
庚寅冬十月亦例の一七日禁足　三昧之草の屋せちく落葉
心ぼそさねいわらくかく湯いとなむに時雨さへふりそいくく寒きを
侘ぬる居風呂わかせとかたる男とも荷せ来したり賄あり
めつらしく仏とかたる今宵心ぞ　炬燵ぬくくと物
頭巾脱ていくくやこのめくしい物
眼ばたくる頭巾あくる也寐覚

医師一行子のうつくしき頭巾ぶり（新五子）
月にそーむ頭巾着て寐る父が顔
うかれめのつをそゝちり衣配
莖漬や妻なく住を窓ふさぐ
日頃経て旨き顔し葉大根
鍋捨る師走の陽や葉大根
僧と居て古りし行氣や納豆汁
曲輪にも納豆の匂ふ齋日ぶり
膳の時はつす椎進女や納豆汁
炉に銚子かけて酒あたゝむる自在の竹に鬼女の面かけたるを
人の泊き居る閨の蒲團をせよと田福まうもれて
吹きおろす胸はり火や卵酒

冬
蒲團
煖器

積む年を郷にのさばる頭巾ぶり（独吟）
蒲團着てこよひの寐入初る汐路ぶり
活僧の蒲團を剝ぐ旅の友
旅の身に添やしたゝむ麑風ぶり
わびしさや旅寐の蒲團あをむ
夜明ぬと蒲團剝ぐ旅の友
足か出て夢も短き蒲團ぶり
下戸一人酒に逃たるこたつぶり（独吟）
草の戸や巨燵の中も風の行
あてやかにふりし女や巨燵
火をつゝみて旅の巨燵や多嵐

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

淀舟や巨燵の下の水の音
駈かけ入あたりゆかめ置炬燵
埋火に猫脊あるゝ我か友
埋火にとあれば留る我か友
父と子によき(新五子)顔
草の屋の行燈もとほす火桶哉
勤行や起別れたる陽婆哉
草の庵わら(新五子)炭をたくべし
末摘や炭吹おこす鼻の先(新五子)
炭賣や手なら負たら多(新五子)
暖甫にも餘りてあはれ老の寒(新五子)

冬歳晩

夢殿の戸へな障りそ煤掃
声立る池の家鴨や煤掃
煤を掃く音せまり来ぬ市の中
煤掃のほこりかつくや奈良の鹿

大名に酒の友あり年忘
褌に二百らくるや厄たとし
声よきも(新五子)頼もしげなし厄掃

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

太祇

寶舟譯の閒つぬ寐言外

年とりて（つま籠）内裏を（た）出るや小梅（ア）訂

年とるも若きハおかし妹が許

几圭師圭廿三日の夜死せり
節分の夜明なりけれバ

死ぬ年の一つ取たよ筆の跡

兼てよく見られ（新五）衣配

谷越に聲かけ合ふや年木樵（新五）

冬之事
除神仏事、冬籠
除衣服、飲食
除蒲團、燈器
除歳晩之事

太祇

炉開や世に遖れたる夫婦合

口切や心ひそかに聲揃ふ

口切や花月さそふて大天狗

口切のとまり客あり峯の坊（新五）

髪置や三つよにいたす思い夫（新五）

人の来て言ねバ知らぬ猪子哉

晝みなつて亥子と知りぬ童の内（新五）

寒垢離の耳の水（に）ふる勢ひ

寒声や親方とのゝ枕もと（新五）

太祇

勤行や腕の脈 衣
寒垢離の顔すゝて行く嵐かな（俳家）
梅幸へ言遣る 積物や我つむ年をかはり見せよ
良見女の難波のよるや夢ぢれ（新五子）
麥時や声て追ふ片手業
獺や飯とられたる細代守（新五子）

冬

雪

喜みをはこべ下さりあつた旨

狩人の鉄砲うつや雪の中
降りとめぬ雪にたおかや蓑と笠
初雪やとくに雪見―旅戻り（新五子）
初雪や酒の意趣ある人の妹
初雪や旅へ遣たる従者か跡
雪や積む障子の紙の音更ぬ
小盃雪に埋てかゝげ行
神さぶる雪の往来や別坐敷

薩摩ゟ宿ヶ
汲心と薩摩ゟ宿して
ゟの朝道ゟて別ゝとて

太祇

見返るや今ハ互ニ雪の人
宿とりて山路の雪吹覗けり

冬

ママ
宅なの竹も底も雪吹哉
うつゝ〻き日おもなりぬ雪の上
御次男ハ馬か上手て雪見哉
(麥人)
足つめたし一日ふたゝ(麥人)ろ〻〻かす
里へ出る鹿の背高し雪明り
長橋の行(麥人)先かくす雪吹哉
初雪や町ゟ居あいす桑門(新五子)
笠の雪互ゟ杖てならひけり(新五子)
雪を見る人さまかしや夜の人(新五子)
夜の雪寐よともいそぬあるし哉(新五子)
積かめる雪の優美や檜皮葺(猶父)

冬

天文(除雪)

玄関ゟて油傘と申時雨哉
濡ゟる的矢をさはく時雨哉
嘗の忍びありきや夕時雨
〻〻その筏の柁や急き
凩の聞き草臥や旅の暮
凩や柴負ゟ老か後ゟり
凩の箱根に落や伊豆の海
寒月や留守たのまれ奥の院
駕を出て寒月高し巳か門
寒月や我ひとり行橋の音

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

人の子の悪所戻りや
門の霜　（独吟）

寒月の門へ火の飛つ祇治左ル
今更にわらはせる霜や藤の棚
腰かける舟梁の霜や野のわらし
鶉の起けり霜のかすり声
苔舟の霜や寐覚の鼻の先
行舟のこはるる霜や芦の音
舟よりあがるよき人冬の雨
風や手に見えてむる老か骸（新五子）
ぬれ色を風吹くやら水車（新五子）
壁迄か板て霞の山居かな（新五子）
犬をうつ石の杖なり冬の月（新五子）
今さらて女のまるあらし（独吟）

冬
地理

たのみなき若草生ふる冬田かな
雨水の赤くさし行く冬田かな（夕迷）

行く馬の人を身にする枯野かな
意趣のある狐見まはす枯野かな
行き〳〵て心後るる枯野かな
塀越の枯野のけふの魂祭

不夜庵の芭蕉翁を祭る
分稲一周の忌となりぬ此翌のまであるて大
往事を思いて
なつかしや枯野にひとり立心

容一て氷らぬ迄そ水の色
手へ〳〵たむ髪や初氷
朝夫の朝になる〳〵へり初氷
次句せん此夜見の氷る迄
氷つく芦分舟や寺の門
とするまた水にかくれつ初氷（うすら（朝寒））
くらかりの柄杓にさはる氷（新五子）
御手洗し庵灯も氷る嵐哉（新五子）

冬
動物

歸来て夜を寐ぬ音や池の鴛
千鳥啼暁もとる女哉
立波を見せて行千鳥哉
鴨の毛を拾ふも元の流哉
はゝ（さゝ）ー鳥もかれたる鷹の声
鷹の眼や鳥のよせ行袖かくれ
鶯や月日覚ゆる親の側
木戸ー（め（猫））まる音や荒井の乙千鳥（新五子）
大食の昔かたりや鮒のお（ママ）
剛の座ハ鮒大たるを見ゝより

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

鰒とふて酒のむ下戸の思ひ外
人心うたゝ寝に鰒を洗ひけり
一はんの外迚て跡や死ぬわらた
鰒つまつ新五子
鰒煮ふくめふしふしと汁
鰒くい人の寐言の念佛哉
塩鱈や旅もするぐのよこれ面
琴こゑとろと日のなきなおこ外 新五子
胴切にもせきりけり海鼠哉
海鼠たゝみかた一形を云れ顔
身を守る炎も一ぬ海鼠哉
杜杖の水をぬめるなおこ外 新五子
便なさわいつれ生海鼠の裏表 新五子

冬植物

掃るか終ふ落葉哉 新五子
米搗の所を替る落葉哉
中〻寐にき窪に鼾(鼾)
岨行けむ音空を行 落葉哉
川澄や落葉の上の水五寸
藤棚の上から
盗人に鐘つく寺や冬木立 新五子
鼠くふ寺のみそ〻枯柳
父ー知らてぬみそ〻歸花
茶の花や風寒き野の葉の囲
未き實と見てよる鳥や冬椿

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用